

シリーズ8

「流れ」でおさえよう！

歴史は「点」では理解できません。ある事件が起きたり、ある制度や法令ができたりにするには、必ず背景があります。理由・原因があります。目的があります。そして、その結果、何らかの影響を及ぼすこととなります。

また、人間には感情があります。怒りもあれば、喜びもあるでしょう。そして、そのような感情で行動を起こしてしまうこともあります。しかし、歴史的事象は一時の感情だけで起きるものは多くありません。人間には理性があります。権力を握った人たち（握ろうとする人たち）は「政権を永らえさせるにはどうしたら良いだろう」と組織や法令について考えたり、人々をそれに従わせるために何をすれば良いだろう、と考えたりします。そして出来上がった組織や法令が人々に何らかの影響を及ぼします。事件や戦乱なども偶発的に起きるものもありますが、多くは戦略や戦術を駆使して戦ったり、和議をしたりします。大将や指導者が賢くないと一族郎党が滅亡してしまいます。「そうならないようにするにはどうしたら良いのか」「勝つためにはどうしたら良いのか」を考え、最終判断を下します。

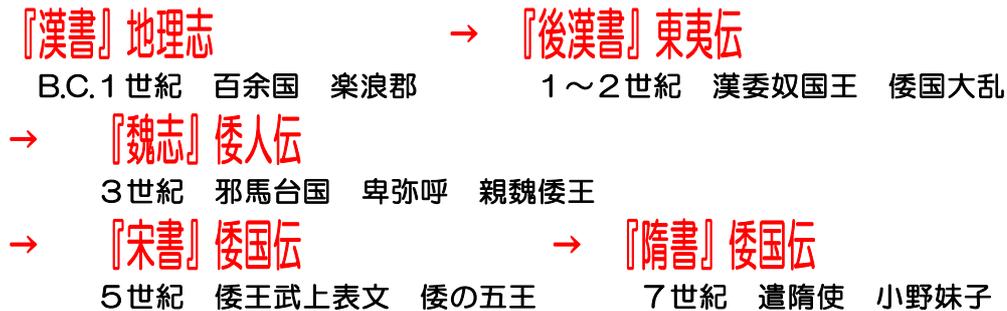
歴史的事象は「線」でとらえましょう。違う表現で言うなら「原因→結果」のような「流れ」で理解しましょう。そのように歴史的事象を捉えるクセを身につけましょう。「どうしてそれが起きたのだろう」「何を目的としていたのだろう」「その結果どうなったのだろう」などと考えていくと歴史が「動いて見えます」。登場人物が「昔の赤の他人」ではなくて身近な人物になりますよ。

これから、日本の歴史を「流れ」でおさえってもらうために、シリーズで飛鳥時代から現代までをまとめていきます。覚えてほしいことは枠の中にまとめます。そして、枠の下にその説明やキーワードなどを書いておきますので、覚えるための補強材料にしてください。

なお、『受験の日本史通信』には紙面の都合で書いていないことも、特に重要なものについては詳細な説明をしておきますので、理解するのに役だててくれればうれしいです。

第1回 飛鳥時代(以前)

〈日本のことがわかる中国の史書〉



原始や古代の日本の様子は日本各地の遺跡から発掘される遺物によってある程度想像することができます。しかし、長らく文字がなかったため、残念ながら当時の詳しい様子は中国の歴史書に頼るしかありません。

まず、紀元前1世紀の日本は100くらいの小国に分立している様子が『漢書』地理志に書かれています。定期的に楽浪郡へ使者を日本は送っていました。また、1～2世紀については『後漢書』東夷伝に記載されています。奴国王が光武帝に使者を出し、「漢委奴国王」の称号や金印を与えられました。また、帥升らが奴隷160人献上していることもわかります。

さらには『魏志』倭人伝には、邪馬台国や卑弥呼の様子が詳しく記述されていますね。239年に卑弥呼は魏へ使いを派遣し、「親魏倭王」の称号を与えられました。

4世紀は「空白の4世紀」と言われて中国の歴史書に日本の記載がありませんでした。でも、『宋書』倭国伝で5世紀の様子が描かれています。倭の五王が朝鮮半島での優位な立場を確保するため、中国に使者を派遣していたことがわかります。武は「安東大將軍倭国王」の称号を与えられました。

最後の『隋書』倭国伝には「日本書紀」に記載されていない600年の遣隋使のことが記載されています。そして、607年、小野妹子は煬帝に会い国書を渡しますが、対等外交を主張して煬帝を怒らせましたね。場合によっては斬り殺されたかもしれません。でも、煬帝は裴世清を日本に派遣しましたね。

ところで、なぜ倭の王たちはわざわざ中国まで使者を送ったのでしょうか？ どうして日本海や黄海を危険を冒して渡らなければならなかったのでしょうか？

それには「中華思想」「冊封体制」という言葉を理解しておく必要があります。

中華思想とは中国を世界の中心である「華やかなる地」とみなす考え方で、天命を受けた天子が徳を持って治め、「化外の民」＝周囲の異民族＝東夷・西戎・南蛮・北狄を教化していくとする考

え方です。

そして、倭のような中華の周辺国は、使者に貢ぎ物を持たせて送り、天子様にご挨拶をすることで臣下と認めてもらうことが必要でした。このことを「朝貢」といいます。そして、朝貢してきた者たちに対して、天子様＝中国の皇帝は爵位や称号（王・諸侯など）、返礼品を与えたりして形式上の君臣関係を結び、形成された国際秩序を「冊封体制」といいます。

そして中国皇帝に朝貢できるのは、その国の王ひとりです。天子が臣下と認めたということは、「冊封体制」という国際秩序の中で、その国の王と認められたことを意味し、大きな意義があります。

奴国王が光武帝に使者を送ったり、卑弥呼が魏へ使いを派遣したりしたのは、先進文化の導入という目的以外に、中国皇帝の権威を借りて、国内の対立する勢力に対して自分の立場を有利にするため、もっと言えば、自分が「倭の王」であることを認めさせるため、だったのです。

〈倭の五王〉

讚 → 珍 → 済 → 興 → 武

5世紀といえば、「英雄の世紀」でした。5人の倭王が「活躍」するわけです。ただ、讚と珍は何天皇なのかははっきりしていませんが、済は允恭天皇、興は安康天皇、武は雄略天皇に比定されていますね。

ところで、武＝雄略天皇である「ワカタケル大王」と記されている鉄剣（刀）が2例発見されていますが、それが発見された古墳は何でしたっけ？

1つは埼玉県稲荷山古墳、もう一つは熊本県江田船山古墳でしたね。つまり、ワカタケル大王の頃には九州から関東までの地域をほぼ勢力下に置いていたように思えます。

では、なぜワカタケル大王など倭の王は中国に使者を派遣＝朝貢したり冊封される必要があったのでしょうか？ 国内に敵対する勢力を駆逐してしまっているように見えるのですが？

『宋書』倭国伝によると、ワカタケルが中国皇帝から認められたのは「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王」であり、これによって倭王としての地位ならびに倭や新羅・任那など朝鮮半島南部の諸地域の軍事的支配権を中国皇帝から承認されることとなりました。

このことは倭の王が倭人の社会や朝鮮南部の諸地域に君臨するためには有効でした。

なぜならば、倭王が自らの実力だけで倭人社会の豪族たちに君臨することが実現していなかったため、中国皇帝からいただいた数々の下賜品を分け与えることは、豪族たちを統合するための手段として機能していたからです。

また、自らの実力だけでは高句麗に対抗できない状況にあったため、朝鮮南部に対する軍事指揮権が中国皇帝から認められたことは、南下政策を進める高句麗に対抗して国際的地位の向上をはか

る手段として有効だったからです。

このように、倭王は中国皇帝から冊封を受けて、その権威を活用しようと朝貢したのです。つまり、**中国皇帝の権威を借りることで、朝鮮半島における政治的・軍事的な立場を有利にしようと考え、朝貢したのでした。**

以上が倭の五王が活躍した時期の状況です。でも、飛鳥時代、推古天皇の時代あたりになると様相が変わってきます。

5世紀の倭王たちは、中国皇帝の権威をよりどころに倭の豪族たちへの優越性や朝鮮南部への軍事指揮権を確保しようとしていました。でも、5世紀末の頃には、氏姓制度の整備が進んで国内統治が安定し、大王の権威が向上してきましたから、中国の冊封を受ける必要がなくなってきました。

ですから、推古天皇の時代に遣隋使を送りましたが、中国皇帝から冊封されることを望まず、むしろ隋と高句麗との敵対状態を利用して、隋との対等な立場を主張していくようになったのです。

〈大化の改新以降の皇位継承〉

皇極天皇 → 孝徳天皇 → 齊明天皇 → 天智称制
→ 天智天皇 → 天武天皇 → 持統天皇

645年に**中大兄皇子・中臣鎌足**らが蘇我氏打倒を企て、**蘇我入鹿**を斬殺し、父親の蝦夷も自害に追い込みました。蘇我本宗家はここに滅びます。

皇極天皇が退位して孝徳天皇が即位し、左大臣には阿倍内麻呂、右大臣に蘇我倉山田石川麻呂、内臣に中臣鎌足、国博士に高向玄理・僧旻を就任させるなど人事の刷新がはかられました。また、都も飛鳥から**難波長柄豊碓宮**に移し、初めての年号を大化とします。そして、646年正月に改新の詔を発布し、公地公民制や班田収授法などを決めたとされます。

孝徳天皇の没後、飛鳥で**皇極が重祚して齊明天皇**になり、**阿倍比羅夫**が水軍を率いて東北の蝦夷を征討します。

齊明天皇の没後も、中大兄皇子は皇太子のまま**称制**を行い、滅亡した百済を救援するために**白村江**で戦いますが、唐・新羅連合軍に敗れてしまいました。そこで、国防を強化し、都を**大津宮**に移し、天智天皇として即位し、近江令や庚午年籍の制定などを行いました。

しかし、天智天皇の死後に皇位継承者争いともいえるべき**壬申の乱**が起き、大海人皇子が大友皇子に勝利します。都を**飛鳥浄御原宮**に移し、天武天皇として即位しました。天武は飛鳥浄御原令の制定や八色の姓などで天皇の権威を確立し、**皇親政治**を推進していきました。

天武の死後、皇后であった持統天皇が即位し、飛鳥浄御原令の施行、庚寅年籍の作成、そして日本初の本格的都城制である**藤原京**を造営していきます。